

■ 書 評



精神科医がみた老いの不安・抑うつと成熟

竹中星郎 著
朝日新聞出版
2019年12月 264頁
本体価格 1,500円+税

高齢者は、連続する喪失体験、孤独、自身の死の現前化などに直面し、適応能力が低下した状態で新たな適応を余儀なくされる。精神科医であった著者は本書で「不安・抑うつを経て得られた成熟」を、また先著では「孤独の中での豊かさ」（『高齢者の孤独と豊かさ』2000年刊行）という創造的な心理過程に着目することを勧めてきた。本書は一般市民を対象とした啓発書であるが、著者の長年の考察がまとめられており、医療介護専門職が読んでも得るところがあると考え紹介する。

著者の記述を引用すると、「高齢者の気持ちの底流には、本人が気づいている、いなにかかわらず抑うつ不安がある。小さな不安がうつ病になることもあれば、妄想、せん妄を引き起こすこともある。（中略）精神症状に目を奪われるのではなく、高齢者を取り巻く生活に目を向けて本人の心理を考える必要がある。そのことを伝えようと思った。」、また「衰えは必ずしもネガティブなものではない。（中略）老いるとは喪失を通して新たな自分を築いていく創造性を持っている。個別性は一面で取斂に、一面で多様化に向かう。規則性、連続性から老いを眺めると醜悪に見えるかもしれないが、老いのすべてが醜悪なわけではない。」。

著者は認知症診療を中心に展開してきた現在の老年精神医学・医療を批判し、「認知症」という用語の不適切性にも言及している。その一部を引用すると、「精神医学では老年は脳器質性疾患、とりわけその中核症状である痴呆（原文のまま）を中心に論じられてきた。（中略）だがその臨床症状を人間関係や『老い』からとらえる視点はなかった。」、「精神症状も彼ら（評者注、「彼ら」は高齢者を指す）の生の一部なのだ。それはごちゃご

ちゃして少しもきれいではなかったが……。その底流に『老い』がある。これまでの精神医学はそれを見ていない」。また、「認知症を囲い込み薬物治療に専念するより、社会に出て『老い』に向き合うと老年精神医学は豊かになるだろう。」とも述べている。

「第2章以降は老いと抑うつ、それに関連する精神症状、認知症についての精神科臨床である。」としており、特に高齢者の生活史・人間関係・心理に注目する必要性を記している。認知症高齢者の行動障害に日頃苦闘している医療介護専門職にとって単なる理念にすぎないと思える記述もある。現実の老年精神科の入院診療では、重度認知症状態の後期高齢者の心理・行動障害への迅速で有効な介入を求められる。すぐに使える解決方法は本書には示されていない。しかし、患者の生活を理解したうえで個別的な医療・介護・生活支援を行う診療上の知恵を本書に見出すことができる。「ディメンティア（痴呆）の患者の話には記憶の誤りや事実誤認、曲解があるが、それに耳を傾けていると何が言いたいかわかる。」および「私が臨床現場や施設で出会った高齢者はそれぞれその流れの中で不安に駆られ、傷つき、抗した人たちだった。彼らはうつ病や妄想、せん妄、異常行動に託してそれを表現している。」という記述は、経験豊富な臨床医から若手への助言になるだろう。評者は患者の攻撃的感情と行動についての著者の意見を聞きなかった。

第1刷に誤記がある。「メマンチンはガラントミン酸代謝に関与している」（p230）のガラントミン酸はグルタミン酸の取り違えであろう。

最後に著者の経歴を本書から略述する。著者は東京都立松沢病院、信州大学医学部、社会福祉法人浴風会病院（退職時は副院長）に精神科医として勤務し、52歳で医療福祉の第一線から身を引き、大正大学人間学部臨床心理学科長、放送大学客員教授などを務めた。その間、浜田クリニック（東京都）と長野県富士見高原病院に非常勤医師として勤務した。著者は本書の執筆途中で余命が限られていることを知り、原稿をほぼ完成させ逝去した。浜田クリニック梶原徹院長が校正の労をとられた。

（有馬邦正）